慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクス主義系恋愛論の地平 : 戦後初期における恋愛至上主義の超克
Sub Title	The horizon of Marxist discourse on love : overcoming the "love-conquers-all" in the early postwar period
Author	本多, 真隆(Honda, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.40- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルクス主義系恋愛論の地平

――戦後初期における恋愛至上主義の超克――

The Horizon of Marxist Discourse on Love: Overcoming the “Love-Conquers-All” in the Early Postwar Period

本多　真隆

１．はじめに

本稿の目的は、敗戦から 1950 年代前後に展開されたマルクス主義にもとづく恋愛論の問題構制を検証し、近代日本の恋愛に関する言説におけるその位置づけを考察することである。

戦後初期は、戦前期のモラルの崩壊や法改正を背景に、多様な恋愛論、性愛論、結婚論が湧出した。そのなかには、現在ではほとんど顧みられていない議論も含まれている。まずは 1952 年に評論家の堀秀彦が述べた以下の言葉から、当時の恋愛論の様相をみていこう。

> 今日の恋愛は混沌としています。多種多様です。さまざまな恋、封建的な恋、資本主義的な恋、<u>或はさらに進歩的な共産主義的恋</u>、精神主義的恋、肉体的な恋、老齢の恋、早熟な恋が、今日このあわただしいこの国の社会のルツボの中で、ゴタゴタに煮返されています。（堀 1952: 73-4、傍線部筆者）

堀は 1940~50 年代にかけて人生論、恋愛論を数多く執筆し、人気を博していた論者だった。おそらく今日流通している恋愛論と大きく異なるのは、「資本主義的な恋」、「共産主義的恋」などというように、恋愛が社会経済思想と密接に結びついていた点にあるだろう。

こうした「共産主義的恋」ないし社会主義国における恋愛に関する議論は 1960 年代前半頃までの論壇においては一定の存在感を有していた。たとえば 1952 年には『中央公論』で「現代の恋愛」特集が掲載され、中国文学研究者の竹内好がソ連や中国の恋愛観について論じている（竹内 1952）。ほかにも心理学者の西平直喜は 1961 年に心理学の入門書で青年期の悩みと恋愛についてふれ、「社会主義的恋愛観」という類型を打ち出し一節を割いている（依田編 1961）。

近代日本の恋愛および近代家族形成を扱った近年の歴史社会学研究では、明治期の恋愛論や大正期の「恋愛至上主義」の系譜などに着目されることが多い。これらについては、戦前期においても知識人を中心に一定程度の影響を与えていたことや、戦後の恋愛観にも接続したことなどの評価が与えられてきた。たとえば菅野聡美は厨川白村らの「大正恋愛論」について、「恋愛の価値化という点では現代の恋愛崇拝の源流といえる」（菅野 2001: 222）としており、また赤川学は、大正期の「恋愛至上主義」、「霊肉一致」に関する議論を、「性＝人格論」という、1970 年代以降に顕在化する「親密性パラダイム」の源流として位置づけている（赤川 1999）。

本多真隆「マルクス主義系恋愛論の地平――戦後初期における恋愛至上主義の超克」『三田社会学』第 27 号（2022 年 7 月）39-52 頁

戦後の恋愛および恋愛結婚に関しては、アメリカ型の近代家族の影響もしばしば言及される。たとえば大塚明子は、戦後初期の『主婦の友』にみられた特徴のひとつとして、アメリカ式の愛情表現の受容をあげている（大塚 2018）。また永田夏来は、戦後日本の家族社会学では、恋愛結婚が大きなテーマのひとつとなり、夫婦関係に関する米国の研究が主に参照されてきたと述べている（高橋・永田 2021）。

本稿が着目するのは、マルクス主義に影響を受けた論者たちは、こうした大正期の恋愛至上主義や、アメリカなど資本主義国の恋愛をも批判していたことである。以下は、日本共産党からの出馬経験もある科学史家の岡邦雄による 1954 年の発言と、マルクス主義にもとづく恋愛論を多数発表していた評論家の平井潔による 1951 年の発言である。

> 従来、恋愛がどう取扱われて来たかと云うと、個人の社会生活のかげで、全くの遊戯、ないし私事としてこそこそと行われる行為のように考える封建的な扱い方か、同じく個人的ではありますが、それを全く現実の生活から切離して、何かそれ自身、美しいもの、価値あるもののように取扱う、いわゆる恋愛至上主義的なもの、ないし慰み半分な考え方か、いずれかが考えられて来ました。
>
> この二つの考え方は、もちろん、どちらもまちがっています。（岡 1954: 92）

> 日本のような封建的色彩の濃い国では特にそうであるが、アメリカの様に進んだ国でも、婦人は男子の従属物である。……共産主義の制度のもとでは真の男女平等になる……性愛（性の行為の上にたつ人間的な恋愛）……性愛に基礎をおく婚姻は……共産主義の世の中でのみ保証されるのである。（理論社編集部編 1951: 182-3）

戦後思想史に関する諸研究が指摘するように、1950 年代頃までの論壇においては、共産党やマルクス主義が絶大な威光を有していた（小熊 2002）。しかし近年の恋愛や家族に関する歴史社会学研究では、こうしたマルクス主義にもとづく恋愛論が顧みられることはほとんどない。だがその立ち位置を考慮にいれれば、近代日本の恋愛論や家族論の展開を総体的に捉えるためには、その検討は不可欠であるように思われる。またそれは、戦後日本のマルクス主義系家族社会学の源流を探る上でも重要な作業となるだろう。

本稿は以上を踏まえ、敗戦から 1950 年代までのマルクス主義にもとづく恋愛論（マルクス主義系恋愛論）の問題構制と、近代日本の恋愛に関する言説におけるその立ち位置を検討する。結論をさきどりすれば、戦後初期に恋愛や性愛をめぐって独自の立ち位置を形成していたマルクス主義系恋愛論の要点のひとつは、大正期の恋愛至上主義の非政治性をどのように乗り越えるかということにあった。結論部ではこの検証を踏まえ、近現代日本の恋愛論の展開をみる上では、マルクス主義に限らないさまざまな論者の思想的背景や社会構想なども射程に入れた歴史社会学的研究が求められることを主張したい。

２．分析の対象と視角

（1）マルクス主義系の恋愛論とは？

まずは、本稿が対象とするマルクス主義系恋愛論について明確にしておこう。本稿では基本的に、マルクス主義、特にエンゲルスとレーニンの思想の影響下で、資本制社会における恋愛、結婚を批判的に捉えた議論を総称して、マルクス主義系恋愛論とよぶ。

資本制社会における一夫一妻制の批判については、フーリエなどの社会主義思想にもみられ、『共産党宣言』にも批判的に継承されているが、それを体系的に論じたのはエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』（1884）とされている。

エンゲルスは一夫一妻制の起源を、個人間の異性愛ではなく、古代ギリシャなどにみられた、血縁関係にある子どもに自身の財産を継がせたいという男性たちの要求から発生したものと位置づける。エンゲルスによれば、原始共産制においては、妻の家政は男性の食料調達などと同じように公的、社会的意義を有するものだったが、家父長制家族、そして一夫一妻制にもとづく個別家族の台頭とともに、公的な性格を失い、私的な労役となった。

こうした事情は近代資本制社会においても同様である。エンゲルスによれば一夫一妻制は近代的な異性愛を発達させる土壌となったが、男性の支配による個別婚という形態がその貫徹を不可能にしている。近代の結婚は、夫が稼ぎ手として妻を養うという、「妻の公然または隠然の家内奴隷制」に基礎づけられており、経済的な利害関係にも大きく左右されるため、個人間の異性愛によって貫徹されていない。そのため異性愛はしばしば、姦通や売春などによる婚外性愛によって補填されることになる。こうした状況認識のもと、夫婦が相互の愛情によってのみ結合する一夫一妻制は、経済的制限が取り払われた社会主義的変革の後に達成されるというのが、エンゲルスの主張の骨子である（Engels 1884=1999）。

エンゲルスの議論は多方面の家族論、結婚論に影響を与え、ソ連の家族法典の成立前後には、宗教的、経済的束縛からの結婚、恋愛の自由や単位離婚制度（夫婦いずれかの自由意志で離婚を可能とする制度）の承認から、家族消滅論に至るまでさまざまな議論や論争が発生した（森下 1981）。こうしたなかで、正当なマルクス主義の恋愛観を表明しているものと位置づけられていたのが、レーニンのテキストである。

レーニンの恋愛論でとくに知られているのは、1915 年に女性運動家のイネッサ・アルマンドに送った手紙である。レーニンはここで、イネッサがある小冊子に記そうとした「恋愛の自由」の項目の全文削除をすすめ、その言葉は、「一、恋愛問題のうえでの物質的（経済的）勘定からの自由か？」、「二、物質上のわずらわしさからの自由か？」、「三、宗教的偏見からの自由か？」、「四、ローマ法皇などの禁止からの自由か？」、「五、『社会』の偏見からの自由か？」、「六、狭い生活環境（農民あるいは小市民あるいはブルジョア・インテリゲンツィア）からの自由か？」、「七、法律、裁判所、警察からの自由か？」、「八、恋愛にむきになることからの自由か？」、「九、子どもを生むことからの自由か？」、「一〇、姦通の自由か？　等々」と少なくとも 10 通りの解

釈ができると指摘する。レーニンによれば、8~10 点目はブルジョワ的な要求に過ぎず、プロレタリアートに必要なのは 1~2 点目であり、3〜7 点目はその次であるという（Ленин 1915=1960）。

エンゲルスとレーニンの議論は、多くのマルクス主義者にやや単純化されながら次のように受容された。すなわち恋愛は性的な放埒ではなく、互いに対等な相互の愛情にもとづく一夫一妻制に接続するものであり、それは前近代的な束縛からも近代資本制社会の経済的制約からも解き放たれた社会主義的変革の後に達成されるということである。本稿では、こうした見解を踏襲ないし同様の立場にたっている議論をマルクス主義系恋愛論と総称する。もちろん社会主義国の恋愛論はこれらに限るものではなく、また個々に相違もみられる。とはいえ戦後日本のマルクス主義系恋愛論に関する系統的な研究がほとんどなされていない以上、まずはその大枠を掴み、さらにこれらの理論がどのように日本社会に適用されて独自の議論を形成していたかを探る作業が必要になると思われる。そのため本稿では、個々の論者の見解の相違には注意をはらいつつも [1]、マルクス主義系恋愛論に一定程度共通する論理、とくに日本社会の恋愛をどのように変革することを目指していたかを分析することに注力する。

資料は、マルクス主義系恋愛論を系統的に把握できる文献がほとんどないため、太田武男・加藤秀俊・井上忠司編『家族問題文献集成』と、国会図書館デジタルコレクションを活用し、対象年代の恋愛論を幅広くみることから抽出した。前者は 1945~60 年代の家族問題（家族関係一般、風俗、生活問題など）に関する文献の題目が網羅的に掲載されており、戦後の家族論の研究にもよく用いられている。このうち「恋愛」、「婚姻」、「性」の項目（「愛」、「性」、「結婚」に焦点化した理由は後述）から、マルクス主義系恋愛論の立場性が確認できる文献を 9 件選定した。後者は明治期から 1968 年までに国内で発行された図書のほか所蔵雑誌がデジタル化（一部未収録）されており、キーワード検索で目次検索（一部全文）が可能である。こちらは収録文献が大量で、また「性」、「結婚」のキーワードの特定が難しいことから（たとえば「性」では「性格」などもヒットし、「性愛」「セックス」「婚姻」など重複する用語が多い）、本稿の主題である「恋愛」で 1945~1968 年の範囲のキーワード検索を行い、約 5200 件（2021 年 8 月時点。再録、再販文献など一部重複あり）のうち、マルクス主義系恋愛論の立場性が確認できる文献を 46 件（『家族問題文献集成』の 9 件と重複。部分的な紹介なども含めると 75 件程度）選定した。もちろん以上の作業でも、マルクス主義系恋愛論のすべてを網羅できたわけではないが、代表的な文献はある程度抽出できたと思われる。引用に際しては紙幅の制限もあるため、抽出した文献内で参照されることが多かった論者（平井潔など）、マルクス主義系恋愛論の主張を縮約しているものを中心とした。

（2）分析の視角

分析に際しては、マルクス主義系恋愛論の問題構制と、近代日本の恋愛論におけるその位置づけを探るという本稿の意図に鑑み、「性」および「結婚」の位置づけに注意する。これは、他の恋愛論との共通性や差異を探るための視角として設定される。

ひとくちに恋愛といってもさまざまなものがあるが、恋愛に関する歴史社会学研究の主要な論点のひとつは、日本における「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」の形成、すなわち「愛」、「性」、「結婚」の三位一体の観念がどのように形成されてきたかということだった。この点について菅野聡美は、「性欲、結婚、恋愛を切り離して個別に考察していたのが明治期であり、大正期の課題は、これら相互の関連づけだった」（菅野 2001: 109）とまとめている。キリスト教者や文学者を中心に論じられた 1880~90 年代頃の恋愛論は、それまで未分化だった肉欲的な「色」と精神的な「恋愛」を対置し、後者の優位性を主張した。対して 1900 年代頃からは「性欲」が肯定的に語られはじめ、自然主義文学や、性科学者による「通俗的性欲学」が隆盛し、特に後者では「霊肉一致」が説かれるようになった。

こうした性欲論と教養主義を融合させ、恋愛至上主義を牽引したとされるのが、厨川白村の『近代の恋愛観』（1922）である（赤川 1999; 菅野 2001 ; 加藤 2004）。そこでは「人格」を重んじた「霊肉合一」と、その完成としての結婚が主張され、また「恋愛」が至上であるが故に「愛なき夫婦関係」は「売淫生活」と位置づけられた（厨川 1922）。こうした恋愛論は昭和期には一時的に収束するが、同書は戦後に再販され、1950 年代頃までの恋愛論にも引き合いに出されていくことになる。本稿でもこれからみていくが、マルクス主義系恋愛論は恋愛至上主義を批判するものであったが、「愛」、「性」、「結婚」の三位一体自体を否定するものではなかった。「性」と「結婚」の位置づけに着目することで、先行研究との接続だけでなく、他の恋愛論との共通点と差異をより詳らかにできると思われる。

以下ではまず、戦後初期の恋愛、性愛をめぐる言論状況を概観し、マルクス主義系恋愛論がどのような批判をしていたかを、戦前期の議論の系譜もふまえながらみる（3）。続いてマルクス主義系の恋愛論における「性」と「結婚」の位置づけおよびそれらの議論と結びついていた社会構想を確認する（4）。最後に、1950 年代後半以降のマルクス主義系恋愛論の失速をおい（5）、近代日本の恋愛論におけるその位置づけを考察する（6）。

３．戦後初期におけるマルクス主義系恋愛論の位相

（1）戦後初期の恋愛論、性愛論

見田宗介は、敗戦から 1962 年までのベストセラー本の分析から、「恋愛とセックスに対する関心」が継続的に上位にあったことを指摘している。見田によればベストセラー本の動向は第Ⅰ期（1946~1950 年）、第Ⅱ期（1953~1958）、第Ⅲ期（1959～）に分けられる（見田 1965）。本稿の主な対象となる第Ⅰ期から第Ⅱ期かけての恋愛論の書き手でよく名があげられるのは、亀井勝一郎、堀秀彦、古谷綱武といった論者たちである。彼らは恋愛を、教養主義的な色彩や人生論、青春論とあわせて論じ、若い世代に人気を博していた。

一方で 1950 年代前半頃までは、戦時中の抑圧的な性道徳の反動として「性」に関する出版物や事象が湧出した時期でもあった。戦前期には発禁処分とされたヴァン・デ・ヴェルデの『完全なる結婚』（1946 年）のように、夫婦間性愛を論じる文献がベストセラーとなったほか、扇

情的な性描写を特徴とする肉体文学や性雑誌も注目を集めた。これらで主に扱われたのは、娼婦や戦争未亡人との恋愛、性愛であった。また街中では、ストリップショーや「パンパン」などの新奇の性風俗があらわれ、メディアでも盛んに報じられた。

戦後初期のマルクス主義系恋愛論は、同時期の恋愛論を名指しで批判することは少なかったが、戦前期の自然主義文学や「恋愛至上主義」（および戦後へのその影響）、そして戦後初期の肉体文学や性風俗については問題化した。以下では、戦前期の社会主義者による議論の系譜も踏まえながら、その展開をみていこう。

(2) 戦前期のマルクス主義系恋愛論

社会主義やマルクス主義に影響を受けた恋愛論の系譜は、堺利彦の著作をはじめ明治期まで遡ることができる。もっともこの時期の社会主義者による恋愛論や家族論は、堺の議論を含めビジョンが不明確なものが多く、哲学者の玉井茂も指摘するように「社会主義的家族論というよりも、当時の家族制度にたいする社会主義的反対表明」（玉井 1959: 151）という性格が強いものだった。

大正期には、恋愛至上主義に影響を与えたとされるエレン・ケイやロシアの革命家であるアレクサンドラ・コロンタイの恋愛論（共産主義社会で性の充足は水一杯を飲むように簡素化されるという、コロンタイズム、「水一杯理論」としてしばしば通俗化）が紹介され、さまざまな論争が引き起こされたが、山川菊栄をはじめ日本の社会主義運動は、政治的活動を第一義として、こうした恋愛論は運動の秩序を乱すものであるとして退ける傾向が強かった。1930 年前後からは片岡鉄兵や江馬修らによる、いわゆる「愛情の問題」を取り上げたプロレタリア文学作品が湧出し、運動家同士の恋愛の問題などが描かれるようになるものの、これらの多くは、通俗的な恋愛の追求が政治的活動の離反につながることを示唆するものであった（山田 1969）。マルクス主義文学運動の中心人物のひとりであった蔵原惟人は 1931 年に、「愛情の問題」は「全体的階級闘争」の一部に過ぎず、「プロレタリア文学の中心的主題になることはない」と述べている（蔵原 [1931] 1932: 651）。

とはいえこの時期には、戦後初期に展開されるマルクス主義系恋愛論の萌芽はすでにあらわれていた。近代資本制社会における恋愛批判は山川菊栄や林房雄などにもみられるほか、プロレタリア文学者の今野賢三は 1930 年に、厨川白村の恋愛至上主義を「ブルジュア個人主義」の産物として批判し、階級意識に目覚めた同志愛を基調とした「プロレタリア恋愛観」の優位性を主張している（今野 1930）。しかしマルクス主義への弾圧が本格化していくこともあり、こうした恋愛論がその後に隆盛した形跡は目立たない [2)]。

翻って戦後初期は、新憲法の制定を契機として男女平等論や結婚論が注目を集めたことや、社会経済的な条件とは異なるモラルの問題が問い直された時代的状況もあり、マルクス主義系恋愛論がさまざまな論者により展開された。1948 年には共産党の機関紙である『前衛』で「新しい恋愛の理論の樹立」が主張され（能智 1948）、1949 年には宮本顕治が、主体性論をはじめ

モラルに関する議論が注目されていることにふれ、「恋愛や結婚の問題」から、戦前期の文学作品にみられる「ブルジョワ道徳」を批判している（宮本 1949）。ではこうした戦後のマルクス主義系恋愛論のロジックはどのようなものだったのだろうか。

（3）戦前期、戦後初期の恋愛論の批判的総括

マルクス主義系恋愛論の立場からみれば、戦前期の恋愛論や恋愛を描いた文学作品は精神主義的ないし肉体的な描写に傾いているものであった。

すでに戦前期から「家」と文学作品の関連について論じていた玉城肇は 1947 年に、北村透谷や自然主義の文学者たちが描く恋愛や性愛を批判的に論じている（戦前期の段階では一部伏せ字だった）。玉城によれば、透谷らに代表されるような「ロマンチスト」は、普遍的な「人間性」を追い求めた点では評価できるが、理想と現実の折り合いがつけられず、その両者に引き裂かれてしまった。対して田山花袋や正宗白鳥ら自然主義の文学者たちは、人間を一個体の生物とみなし本能的な性欲に目を向けたことで、「ロマンチスト」の観念的な恋愛観を打破する可能性を有していたが、「恋愛を性欲に還元」することで刹那的な恋愛観に陥り、自然的必然の支配下のなかで「ニヒリズム」と「人間蔑視」、「自己嫌悪」のスパイラルに陥ってしまった。玉城によれば自然主義は、「封建的な支柱の上に展開されつゝあつた日本資本主義の現実」のなかで「センチメンタルな詠嘆」を発するだけにとどまり、「ブルジョワジーに奉仕」するものでしかなかったという（玉城 1947: 83-94）。

宮本百合子も 1947 年に玉城と同様の見解を示しつつ、戦後の状況にも言及している。宮本によれば、当時人気を博した坂口安吾らの肉体文学は、自然主義文学を「現代らしく歪ませ」たものであり、「人間性の解放といふやうなものを、性的な交渉、極端にいへば性器でもつて全人間の存在を表現するといふやうな間違ひ」なのであった[3]（小倉・宮本 1947: 90）。

玉城の発言にもうかがえるように、マルクス主義系恋愛論には大きくわけてふたつの批判対象があった。ひとつは恋愛そのものを抑圧する前近代的な束縛であり、そしてもうひとつは恋愛のあり方を歪ませる近代資本制社会の問題であった。

婦人問題に関する著作を多数執筆した能智修弥は 1949 年に、これらの点を踏まえながら戦前期の恋愛のあり方を批判的に総括している。能智によれば、戦前日本では「ブルジョア革命が中途はんぱにおわつてしまつた」ため、「恋愛の自由ということさえも完全にはかちとることができなかつた」。しかし近代資本制社会においても、政治家や財閥の政略結婚にみられるように、社会経済的な条件が恋愛を制限する。また労働者たちは貧しく不安定な状況に置かれており、「いつ会社をくびにされるかわからないような不安な世の中では、ほんとうに自由な、何ものにも制限されない恋愛はうまれてこない」（能智 1949: 66-9）。

こうした状況を改善するには、社会主義的革命に裏打ちされた「民主主義」の達成が不可欠である。「平和と民主主義は恋愛をそだてる」ものであり、戦前日本でも大正デモクラシーの時代にその試みがなされたが、それは不完全に終わってしまった。なぜならそれらは社会経済的

な条件に目を向けなかったからである。能智によれば、厨川白村や土田杏村、倉田百三や菊池寛たちは、「恋愛とデモクラシイの関係もよく知つていた」が、それは思弁上のものにすぎず、「社会革命を断行しなければほんとうの民主主義は実現しないことを知らなかつた」。そのため彼らの議論は「個人主義の主張」にとどまり、戦後に厨川の『近代の恋愛観』が再販されたことや、太宰治の情死が注目を集めたことは、「恋愛とデモクラシイの関係」が十分に理解されていないことを示しているのだという（能智 1949: 70-83）。なお、この時期に人気を博していた亀井勝一郎は、1948 年に倉田の評伝を刊行している。

戦前期の文学への批判はプロレタリア文学にも及んだ。1931 年に蔵原惟人から「愛情の問題」を中心的に論じた作家として名指しで批判を受けていた徳永直は 1949 年に、日本プロレタリア作家同盟の結成後、運動家同士の恋愛や労働者の恋愛が多少は描かれたが、「あまりちやんとしたものはない」と述べている。徳永によれば日本の恋愛文学は、対象となる女性が「芸者とか、女給とか、舞妓とか、ダンサーとか、特殊の女」に偏っており、彼女らを「床の間にかざつた花のように」描くのみで対等な相手とみなすことが少ない。「恋愛というものが、花びらだけのものとして理解」されているのは、「金の力で女を左右し、つぎの女からつぎの女へとうつり歩いてゆくブルジョワジーの性生活からうまれた恋愛観」の反映である。しかしプロレタリア文学においても、「はたらいている女性の、それぜんたい、その家族から環境から根こそぎ描きだされた恋愛というものはほとんどまれ」であり、「今日の勤労者」にも、ブルジョワ的な恋愛観が巣食っているという（徳永 1949: 50-7）。

徳永によれば、「恋愛とは、性欲を土壌として、人間の種族保存、それから種族の向上のための精神現象」であり、結婚によって当初の感情は収まっていく傾向にあるが、「ますますふくざつ多様になり、恋愛の色彩が変化し、発展する」。しばしば「結婚は恋愛の墓場である」といわれるが、それは「ブルジョア恋愛観がつくつたもの」に過ぎない。こうした立論は、「結婚は恋愛の墓場である」という言い回しについて、「恋の花やかさ美しさだけが結婚後に於て消滅するといふ意味に於て、確かに半面の真理を語っている……しかし墓場だと見えるのは……外面的だったものが内面的となり、その深さを増すと共に潜在的性質のものとなったのである」（厨川 1922: 37-8）と述べた厨川白村の恋愛観との近接性をうかがわせる。しかし徳永によればこのようなあり方は、「経済力や階級性によつて、原始的にはばまれているもの」が取り払わなければ達成できないという。以下ではマルクス主義系恋愛論における、「愛」、「性」、「結婚」のあり方を具体的におっていこう。

４．恋愛と社会主義的変革

（1）恋愛と階級闘争

結論からいえばマルクス主義系恋愛論の多くは、「愛」と「性」の統一、その完成としての「結婚」という立論においては、大正期の恋愛至上主義とも共通していた。しかしそうした恋愛は、社会主義的変革のなかでより高次のものになっていくというのであった。

この問題を中心的に扱った論者のひとりとして評論家の平井潔があげられる。平井は 1951 年に、「恋愛の尊さ、性の純潔が失われて、退廃するのが、共産主義の現実ではないのか？」という、しばしば共産主義者に寄せられた質問に対して、エンゲルスやレーニンを引きながら回答している。平井によればこうした質問にみられる大正期に流通した通俗的なコロンタイズムは「全然マルクス主義的でない」（実際にレーニンも否定的だった）。むしろ恋愛至上主義に影響を与えたエレン・ケイの著作で描かれるような恋愛は「共産主義の世の中でのみ保証される」。なぜなら近代資本制社会における女性は「夫への寄生者として消費生活のみを分担する」に過ぎず、「男性は女性を対等の人間と考えることはどうしてもできない」からである（理論社編集部編 1951: 179-83）。

平井は 1956 年に「恋愛至上主義から恋愛の弁証法へ」というテーゼでこの議論を発展させる。平井によれば厨川白村は、「人間と社会との弁証法的発展の可能性」を理解しておらず、「男性も女性も、そのいとなむ恋愛じしんも、無限に発展するものである」ことを認識していない。そのため厨川の著作には、前近代的な束縛から恋愛を解放させる新しさはあるが、「女性を成長する人間、無限に伸びる個性をもつひとりの人格とみることのできない古さ」も漂っており、「女性を固定化し、恋愛を固定化している」という。これに対して平井は恋愛を「男女相互の努力と精進によって、どの様な高さにでも高められるもの」とし、「恋愛の弁証法」を主張する。それは男女がともに社会主義的変革を目指すことで成り立つものであった。平井はそのあり方について以下のように述べる。

> 結婚は恋愛の墓場ではなくて、恋愛の発展であり、恋愛の前進です。……
> 資本制社会はあらゆる階級の男性と女性とに複雑な制約を加えている。それらの制約、束縛、障害のなかで生活する女性と男性との間には、必ずいろいろな矛盾が生まれてきます。その生活上のもろもろの矛盾にからまる思想の進歩と停滞のなかで、搾取なき社会に対する同じ理想のもとで、階級闘争と結びついた家庭と社会のなかでの民主化への努力を通じて愛情が高められるのです。……
> 恋愛は、同志愛によってこそ、ひろい結合の可能性が与えられるばかりでなく、男女の愛情が無限に成長するという可能性が与えられているのです。（平井 1956: 43-9）

ひとことでいえばこれは、恋愛至上主義でも主張されていた「愛」、「性」、「結婚」の三位一体を、階級闘争に結びつける議論だった。マルクス主義系恋愛論においては、恋愛は私的なものに留めるものではなく、社会主義的変革の基盤と位置づけられたのである。

(2)「政治」に従属する恋愛

こうした論調は、マルクス主義系恋愛論の基本的なトーンでもあった。そこで目指されたのは、恋愛の感情を、社会主義的変革の感情に結びつけることであった。

冒頭でも取り上げた岡邦雄は1952年に、「公情」と「私情」という言葉でこの点について詳述している。岡はまず恋愛が婦人問題として扱われてきたことを批判し、男女平等が定められた今日では「男女両性に共通な……一つの社会問題、モラルの問題として再提出」される必要があることを主張する。そのためには恋愛を「単なる私情」に留まらせず、男女平等の理念をもとに「生産性をもつもの」にしなければならない。そこで提起されるのが、「公情」と「私情」の接続である。岡によれば「公情」とは、職場の同僚や組合活動のメンバー同士のあいだで醸し出される「民主主義的な集団的人間の雰囲気に包ま」れた「対等な位置にたつ友人感」であり、それを「私情」と接続させることで、恋愛至上主義で讃えられるような恋愛を、「生産的な生気に満ちた恋愛」に高めることができるという（岡 1952: 43-52）。

すなわちマルクス主義系恋愛論にとって、恋愛は私的な行為ではなく、社会的さらには社会主義的変革に連なる行為であった。その恋愛および「結婚」の理想形は、夫婦で社会主義的変革に関わる、あるいはともに労働に参画し、そのなかでお互いの「愛」と「性」を深めることだった。その模範は当時の社会主義陣営の国にあるとみなされ、しばしば理想化された。たとえば平井潔は1957年に中国について、「若い男女の交際のため、さらにその愛情の成長のため、そしてすすんで、男女が結婚しても働けるために、必要な多くの条件」が生成されつつあり、日本でも組合や職場、地域の活動を通して「男女が協力して……そこから生まれる愛情によって新しい前進のエネルギーをつくり出し」ていくべきであると述べている（平井 1957: 111-2）。工場労働者や農家の人びとを対象とした講演などでは、職場での男女の協同、その先に発生し得る職場結婚を奨励しているものが少なくない。

毛沢東の紹介などに尽力した浅川謙次が1954年に打ち出した「革命的恋愛観」は、このようなマルクス主義系恋愛論の思想を端的に要約したもののひとつとしてあげられる。

> 精神的な愛は肉体的な愛と統一されなければならない。……われわれは、青年たちが恋愛する時……正しい革命的な恋愛観を打ち立てるよう希望する。……
> 革命的恋愛観とはなにか？革命的恋愛観とは、革命的人生観を基礎とし、恋愛を革命の利益に従属させるものであって、……個人的な愛情の満足を目的とするものではなく……日常の生活・仕事・学習での接触を通じて、おたがいに理解をふかめていき、幸福な結合と、いっそうよく人民に奉仕する目的を達成しようとするものである。……
> したがって、それは政治を第一義とし、感情を第二義とするものであり……それによって、愛情をいっそうつよめ、深め、発展させることができて、人民の革命事業に、いっそうの熱と光とを加えることができるのである。（浅川 1954: 169-70）

マルクス主義系恋愛論は、恋愛至上主義で主張されていたような「愛」、「性」「結婚」の三位一体をより高次のものにすることを目指していた。とはいえそれは、「恋愛」を至上に置くのではなく、「政治」の優位性の上に成り立つものだったのである。

５．マルクス主義系恋愛論の失速

マルクス主義系恋愛論は、少なくとも論壇上では、1950 年代後半頃から失速する。本稿で取り上げた主要な論者たちの恋愛論は、1960 年代以降では目立たない。その失速の過程を詳述することは本稿の限界を超えるが、いくつかの状況を確認しておきたい。

まずそもそもマルクス主義系恋愛論は、その主対象であった青年労働者たちの広範な支持を得ていたものでは必ずしもなかったと思われる。1953 年に日高六郎は、当時の 20-25 歳の学生や労働者たちの手記の分析から、学生は恋愛についてロマンティックかつ多弁であったが、労働者はそれを語ることはまれであり、「愛情の交換であるよりも、生活への土膏石」としての家庭生活を求める傾向があったと述べている（日高ほか 1953: 216-21）。

また 1950 年代半ば頃からはマルクス主義系恋愛論を批判する論調も目立ってくる。たとえば 1954 年に文芸評論家の河上徹太郎は「恋愛がブルジョワ社会の消極的な消費面に於ける行為だと納得させられては……恋人たちは、徒に遊戯的な、非生産的な気持ちになるより外ないのではないか？」と苦言を呈している（亀井編 1954: 7）。

1950 年代後半以降のマルクス主義系恋愛論の失速は、スターリン批判をはじめとした 50 年代半ばの共産党の権威の低下とも無関係ではないだろう。とはいえ本稿では、この時期には恋愛を論じる磁場も大きく変容しはじめていたことを指摘しておきたい。ひとことでいえば、恋愛の社会変革の源泉としてのニュアンスが薄まっていったのである。

こうした論調は多く見出だせる。たとえば 1960 年に心理学者の間宮武は、「現代のように交際はオープンであるし、恋愛の社会逃避性という性格はずーっとへって来ている。だから一切のエネルギーを没入するということはない。……これが現代的恋愛の特色である」（間宮 1960: 196）と述べる。ほかにも古谷綱武は 1961 年に、「ぼくなどの若いときには……その時代の恋愛は、自分たちが孤立して、周囲の反対とたたかって……愛しあう幸福を求めていくことであった」（古谷 1961: 142）と述べ、そうした雰囲気は薄まっていることを指摘している。マルクス主義系恋愛論の課題は、社会的承認を得ていないなかで営まれていた恋愛の「社会逃避性」の超克にあった。その上で、恋愛と社会変革を連動させるという論理が成り立っていた。しかしその前提は、モラルの変化とともに掘り崩されていったのである。

社会心理学者の我妻洋は 1959 年に、戦後初期の革新論者が唱えた「民主主義」と共働き夫婦をめぐる問題について次のように述べている。

> 「民主主義」を熱心に信奉しただけでは十分ではないのである。……夫婦がそれぞれ職業や仕事を持ち、困難なしに暮らしてゆくのは……平穏な結婚生活を送るのより、はるかにむつかしい。……「女性の本来の場所は家庭であり、社会で働いて一家を養うのは男性の仕事である」という、長い伝統につちかわれた観念が、たいていの人の心の底には根深く残っている。（我妻 1959: 155）

実際には、専業主婦世帯が広まったのは戦後の現象である。とはいえ工業化のなかで「家族生活が豊かになる」ことが目指された戦後家族の動向のなかでは（山田 2005）、マルクス主義恋愛論が説得力を失っていくのは、無理もないことだっただろう。

６．結論

本稿はこれまで、1945～50 年代に展開されたマルクス主義系恋愛論の論理構成を、日本社会への適用と、「性」、「結婚」の位置づけを中心に検討してきた。近代日本の恋愛論におけるその位置づけをごく簡潔にまとめれば、恋愛至上主義とマルクス主義の接続、すなわち日本における「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」の一形態だったといえるだろう。

マルクス主義系恋愛論の批判対象は、前近代的な恋愛の束縛や、恋愛のあり方を歪ませる近代資本制社会であり、そしてそれらのなかで生まれた、厨川白村に代表される恋愛至上主義の非政治性をどのように乗り越えるかということだった。論者たちは、恋愛至上主義で唱えられていた「愛」、「性」、「結婚」の三位一体を受け継ぎつつも、その真の実践を社会主義的変革の後に見出し、その立論の過程で恋愛至上主義は、「同志愛」に接続されたのだった。

菅野聡美は山川菊栄による恋愛至上主義への批判について、「公事は私事に優先するという白村以前の『古い』感覚をもっている山川にとって、恋愛はしょせん主たる関心事ではなかった」（菅野 2001: 200）と評しており、この点は、恋愛を政治に従属させがちだった戦後初期のマルクス主義系恋愛論にも部分的に当てはまる。しかしそれは、「私事」の重要性を単に捨象するのではなく、むしろ厨川らの恋愛至上主義を踏まえた上で、「公事」と「私事」の統一が目指されていた点は留意されてよいだろう。

本稿が見出した特徴が、エンゲルスやレーニンの議論、また社会主義国の恋愛論にどこまで当てはまるかは、また別個の検証が必要となるが [4)]、こうした課題のほかに、近現代日本の恋愛論を論者の思想的背景や社会構想も併せて検証することの必要性も述べておきたい。恋愛論に関する思想史や歴史社会学研究が指摘するように、戦前日本の国家体制では内面的な私領域が承認されておらず、恋愛の肯定は「国家」「民族」「教養」といった公的価値とともに論じられる傾向にあった（阪井 2021）。その特徴は戦前期の国家体制を批判する言説にも共通していたのではないか。

またエンゲルスのテキストは、マルクス主義に立脚していない論者によっても頻繁に引用されていたものである。その影響（および批判）は、吉本隆明の対幻想論や新左翼、さらにはそれらの批判からあらわれたフェミニズムの恋愛論なども含めて接続を見出だせるのではないか。あるいは恋愛と性別役割分業、経済的問題の関連は、「第二の近代」を迎えた現在、かたちをかえながら大きなテーマになっている。論者たちが依拠する社会経済思想や社会構想を含めて検証することで、近現代日本の恋愛論を捉えるためのアクチュアルな新たな線を引けるのではないか。本稿の作業は、そのささやかな一歩と位置づけたい。

【註】

1) 戦後初期のマルクス主義系恋愛論のなかでの見解の相違は、平井潔（1949）による、太田典礼の「恋愛社会主義」の批判などがあるが、多いとはいえない。平野謙ほか（1949）、岩佐茂ほか（2013）などでも恋愛論はほとんど取り上げられていない。なお、平井による批判は、太田の「コロンタイズム」との近接性を指摘するもので、その批判はレーニンの見解に由来しているものであり、戦後のマルクス主義系恋愛論の基本的な認識だったといえる。

2) 本稿では紙幅の関係上、極めて切り詰めて戦後初期の恋愛論の状況と戦前期の議論を紹介したが、実際はそれらにも恋愛と社会構想をめぐる多様な問題意識がみられる。本稿の記述は戦後初期のマルクス主義系恋愛論の位置づけをみる補助線としてのものである。

3) 同様の議論は、クロタキチカラ（1949）など。なお、「エロ・グロ」への批判など、性文化の爛熟をブルジョワ的なものとみなす論調は、戦前期の共産党周辺にもみられた。

4) Stinow, Stansell & Thompson (1983) はエンゲルスの思想が同時代のブルジョワジーの保守的家族像と近似していたことを指摘している。なお平井潔は、同志愛にもとづく恋愛を奨励するヴェ・コルバノフスキーの家族論を参考に持論を展開していた。

【資料】

厨川白村, 1922, 『近代の恋愛観』改造社.

今野賢三, 1930, 『プロレタリヤ恋愛観――如何に新しく恋愛すべきか』世界社.

蔵原惟人, 1931[1932],「芸術的方法についての感想」『芸術論』中央公論社, 633-82.

玉城肇, 1947, 『新しき愛情』現実社.

小倉金之助・宮本百合子, 1947, 「對談 科学・宗教・恋愛」『展望』15: 75-91.

能智修弥, 1948, 「恋愛論」『前衛』24: 52-60.

クロタキチカラ, 1949, 『性愛新道――正しい恋愛・結婚・家庭えの道』農産漁村文化協会.

宮本顕治, 1949, 「共産主義とモラル――恋愛と結婚の問題を中心に」『マルクス・レーニン主義講座 1』三一書房, 91-125.

能智修弥, 1949, 『恋愛から結婚へ』労働教育教会.

平井潔, 1949, 「新しい恋愛とその結実のために」玉城肇・宮本忍・鷲沼登美枝・森山豊・馬島倜『新しい結婚読本』中森書店, 39-65.

徳永直, 1949, 『人生について』ナウカ社.

理論社編集部編, 1951, 『共産主義への 50 の疑問』理論社.

堀秀彦, 1952, 『女性の世界――恋愛・結婚・家庭』要書房.

岡邦雄, 1952, 『思想と人生』文理書院.

竹内好, 1952, 「戦争及び平和と現代の恋愛」『中央公論』67(10): 275-80.

日高六郎・佐々木斐夫・奈良本辰也・大久保忠利, 1953, 『日本人の思想と意識』春秋社.
浅川謙次, 1954, 『革命的人生観 下巻』三一書房.
亀井勝一郎編, 1954, 『若い人々のための恋愛論』要書房.
岡邦雄, 1954, 『新しい人生論』文理書院.
平井潔, 1956, 『人生と愛について』社会思想研究会出版部.
平井潔, 1957, 『愛と性』社会思想研究会出版部.
我妻洋, 1959, 『愛の認識について――結婚の幸福』光文社.
間宮武, 1960, 『異性――性の心理とモラル』講談社.
古谷綱武, 1961, 『職場の生き方』青春出版社.
依田新編, 1961, 『青年の悩み――人生の危機』大日本図書, 139-63.

【文献】

赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.
荒正人・本多秋五・平野謙・佐々木基一, 1949, 『討論 日本プロレタリア文学運動史』三一書版.
Engels, Friedrich, 1884, *Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats*: Hottingen. （=土屋保男訳, 1999, 『家族・私有財産・国家の起源』新日本出版社.）
岩佐茂・渡辺憲正・島崎隆, 2013, 『戦後マルクス主義の思想―論争史と現代的意義』社会評論社.
菅野聡美, 2001, 『消費される恋愛論――大正知識人と性』青弓社.
加藤秀一, 2004, 『＜恋愛結婚＞は何をもたらしたか――性道徳と優勢思想の百年間』筑摩書房.
Ленин, Владимир Ильич, 1915, ИНЕСЕ АРМАНД（=1960 マルクス＝レーニン主義研究所レーニン全集刊行委員会訳, 1960, 「イネッサ・アルマンドへ」『レーニン全集 第 35 巻』, 182-3. ）
見田宗介, 1965, 『現代日本の精神構造』弘文堂.
森下敏男, 1981, 「初期ソビエトにおける家族消滅論と自由恋愛論」『ソ連・東欧学会年報』10: 90-101.
大塚明子, 2018, 『『主婦の友』にみる日本型近代結婚イデオロギー』勁草書房.
小熊英二, 2002, 『＜民主＞と＜愛国＞――戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
阪井裕一郎, 2021, 『仲人の近代――見合い結婚の歴史社会学』青弓社.
Snitow Ann, Christine Stansell & Sharon Thompson, 1983, “Introduction,” Snitow Ann & Thompson Sharon. Eds., *Powers of Desire: The Politics of Sexuality*, Monthly Review Press, 9-48.
高橋幸・永田夏来, 2021, 「これからの恋愛の社会学のために」『現代思想』49(10): 8-30.
玉井茂, 1959, 『結婚と家族の思想史――家庭を創る基礎』理論社.
山田昌弘, 2005, 『迷走する家族――戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣.
山田清三郎, 1969, 『プロレタリア文学史 下』理論社.

（ほんだ　まさたか　明星大学人文学部）